

《Research Note》

## Affective Practice of ‘Partaking’ in Urban Society of India

Nobuo Yamagishi

This paper aims to discuss how social relationships are being built in urban India under threat of COVID-19 with particular reference to the food practice of the International Society for Krishna Consciousness (ISKCON). A nationwide lockdown forced a great number of migrants and slum dwellers to go hungry in the streets, which had to be urgently addressed with the food support of religious sectors including ISKCON. As ISKCON has appealed for the preparation and distribution of prasādam (food offered to Krishna) as a social service for needy people, many individuals and corporations engaged in this service process with various intentions. This is because the practice of serving and sharing sacred food itself can be a source of affective movement that connects oneself with others and takes shape as activities in the public sphere. This new way of partaking food is neither a religious practice that only devotees systematically follow nor a public policy that only the government adopts to combat poverty. It is a social relationship that dynamically emerges among people of different bodies to partake in the sphere of food and life through the plural values of everyday livelihood beyond the religious-public binary.

# 接触と摂食

## — インドにおける情動実践の展開 —

山 岸 伸 夫

### 1. 問題の所在と視角

本稿は、新型コロナウイルスの感染拡大という脅威（以下、コロナ禍とも表記）のなかで、インド都市部の社会関係はいかに構築されてきたのかを、新興宗教組織クリシュナ意識国際協会（International Society for Krishna Consciousness、以下、ISKCONと表記）による食の実践から考察することを目的とする。ISKCONは、インド中央政府による全土封鎖の措置に合わせて、各都市の寺院やその近くに巨大な調理場を設置し、1日数十万人という人々に神への供物のお下がり（プラサーダム *Skt. prasāda*）を提供してきた<sup>1)</sup>。まずここで問われるべきは、都市が完全に封鎖されたにもかかわらず、ISKCONのような宗教組織がなぜ公共領域において活動できているのかという点である<sup>2)</sup>。

インド都市部では、1991年以降の経済自由化と本格的なグローバル化にともなって経済的な格差が広がり、いわゆる貧困層と呼ばれる人々が急増した<sup>3)</sup>。中央政府はこれを受けて、1997年に公的分配システム（Public Distribution System）を開始し、貧困線<sup>4)</sup>以下の世帯を対象に安価な値段で穀物の販売を行うようになった。その後、都市全体の貧困率はたしかに減少し、このシステムによる一定の効果を評価する声もあがった<sup>5)</sup>。しかし実際には、経済成長率に見合うほど貧困率が減少したわけではなく、販売商品の横流しや、分配カードの偽造、対象家計の特定化の怠慢など、システム自体の課題が逆に貧困撲滅の足かせになっているとの批判もある〔首藤 2006 : 117〕。

このような貧困対策で見過ごされてきたのが、経済自由化以降に都市に流れ込んだ移民労働者やその家族の存在である<sup>6)</sup>。移民労働者は、家内製造業やサイクル・リキシャ業、路上販売業といった、いわゆるインフォーマル・セクターに従事している。彼らは都市の生活を支えてきたにもかかわらず、政府による規律や警察権力による抑圧に翻弄され、生活の保障を享受できていない。政府からライセンスを付与されながら、厳しい営業規制や通告なしに行われる取り締まりのために、労働空間を制限され自らの生活を安定させることができずにいるのだ。

加えて、都市計画にあっては、路上や土地を占拠するスラム住民の生活空間が排除の対象になってきた。1970年代から都市に流入した人々の不法占拠はいまだに続いており、それに対して彼らを積極的に排除しようとする運動も起きている。また、独立後の民主主義がスラムを生んだと考え、土地の価値を効果的に上げるためにスラムを排除すべきだと主張する中間層も多くいる<sup>7)</sup>。スラムの再配置 (replacement) が提案されたとしても、それに付随する水管理、排泄、下水、医療に関する課題に対し、行政は何ら有効な解決策を提示できないでいる [Priya 2006: 244]。

移民労働者やスラム住民の生活が改善されない理由の一つに、彼らの法的地位の問題が挙げられる。家内業や屋台やスラムに関連する各州の行政法は、植民地期にイギリスが制定した「1882ボンベイ行政自治法 (Bombay Municipal Corporation Act of 1882)」に拠っている [cf. Kumar and Bhowmit 2010: 49]。これは、植民地行政官が都市の貧困層や移民を管理する目的で制定されたが、インド独立後もその大枠は変わらない。支配や規律を前提とした植民地主義的な法制を中央政府が引き継いだために、貧困層の法的な保護はほとんど進展していない。域外からの貧困層は、まさに「第二の植民地 (second edition of colonialism)」 [Nandy and Jahanbegloo 2006: 125] のなかで不安定な生活を余儀なくされているのだ。

そのようななか、多くの自助グループやボランティア団体が登場し、自発的に貧困問題に取り組むようになった。政府も、これらのグループの活動に予算を充てることで、より効果的な開発が行えると期待するようになった。インド

では、独立以前からボランティア活動が多く行われてきたが、そのような活動には宗教組織も大きく関わってきた。近年では、宗教組織の派生団体による都市貧困層の支援も注目されており、さらに新興宗教団体の派生団体による支援活動も活発になっている<sup>8)</sup>。コロナ禍のなかでISKCONが公共領域での活動を可能にしているのは、このような背景によるものと考えられるが、では宗教が公共世界につながる状況をどのように理解すればよいのだろうか。

これまでインドでは、公共領域に台頭する制度あるいはイデオロギーとしての宗教ばかりが論じられたが [cf. 関根 1999]、その視点では宗教が制度を越えて公共世界につながる可能性を理解することは難しい。そこで本稿では、コロナ禍においてISKCONによる食の実践がなぜこれほどまでに大規模に展開されているのかを探ることで、制度を越えた宗教の公共的意味を確認していくことにする<sup>9)</sup>。

そのための一つの視角として、食をめぐる実践が制度化されつつ制度化されないような、身体・情動的な関係性に注目したい。これについて松嶋は、身体は常に諸制度のなかにあり、諸制度を身につけ、制度化されていると述べる [松嶋 2014]。さらに、身体は制度化されるからこそ制度化されざる部分を不可避的に抱え込み、またそれゆえに制度を跨ぎ越し、制度を組み換え、新たな制度を作り出す主体にもなりうるという。ここで松嶋は人間の情動 (affect) に注目し、行動することで生じる多様な情動が「異なる身体」を作り、異なるパースペクティブが生まれるために、制度を跨ぎ越すこともあると主張した。

食をめぐる関係性の創発過程は、もてなし味わう現場の異なる参加者が互いに溶解し、自他の区別を越える (つまり情動が動かされる) ような経験をもって出発する。このような、身体的触発によって自己と人々の生を支える「多数性の次元の経験」 [松嶋 2014 : 95] は共同体 (制度) の外にも広がり、思いがけない出会いをもたらしうる。本稿では、美味しくて栄養のある料理の調理、運搬、共有を通じた接触 (= 摂食) という働きかけ、すなわちもてなし味わう情動実践という視点から、宗教世界と公共世界の対話・媒介をいかに捉えることが可能なのかを、ISKCON デリーによる支援活動を事例に分析していきたい<sup>10)</sup>。

## 2. 聖なる食を届ける奉仕活動

ISKCONは、真の平和と団結のためにクリシュナの知識を世界に広げることを目的として、A・C・バクティヴェーダーンタ・スワミー・プラブパード（A. C. Bhaktivedanta Swami Prabhupada 1896-1977）によって1966年にニューヨークで創設された<sup>11)</sup>。中世インドの聖者チャイタニヤ（Chaitanya 1486-1533）の教えを根本としたISKCONの新たな信愛（バクティ Skt. *bhakti*）運動は、対抗文化運動が台頭していたアメリカで多くの若者を魅了し、経済自由化を経験したインド社会においても注目されるようになった。この新たなバクティ運動の主軸となったのが、厳格な菜食料理をクリシュナのために調理し、献供し、それをプラサーダムとして共有する身体実践である<sup>12)</sup>。

チャイタニヤ派は、クリシュナの名号を唱え神の愛に触れる「詠唱の共同体」として知られるが、プラサーダムを共有することもまた、クリシュナの愛を文字通り「味わう」ための重要な様式とされた〔Toomey 1986: 76〕。とりわけISKCONでは、性的な官能性を否定しつつ、クリシュナへの信愛を遍く徹底させるために、自らの情動や官能性をこの味覚の実践に向けていくことになった。一方で、当時の「反カルト運動」で印象づけられた閉鎖的な組織のイメージを払拭するために、プラサーダムを共同体の外で広く提供する方法が採用されたのである。

ISKCONでは、寺院周辺に暮らす人々をプラサーダムで守るとの社会奉仕の指針が、1970年代にすでにバクティヴェーダーンタによって示されていた。彼の直弟子は、クリシュナに料理を献供するだけでなく、クリシュナを知らない世界で人々にプラサーダムを味わわせることも神への奉仕であると解釈していった。このような理念に基づいて支援組織フード・フォー・ライフ（Food For Life）が設立され、世界約60カ国で、飢えに苦しむ人々のために菜食料理が提供されるようになった。路上生活者のための日常的な炊き出しから、飢饉や内紛に襲われた地域での救援活動にいたるまで、支援活動はさまざまな場面で展開された<sup>13)</sup>。

インドのフード・フォー・ライフも自然災害などの緊急事態に支援活動を行ってきたが、近年とくに注目されているのが公立学校への給食支援である。フード・フォー・ライフの傘下に創設されたアクシャヤ・パトラ・ファウンデーション (Akshaya Patra Foundation) は、カルナータカ州政府や地元の有力者とともに学校配給プログラムを開始した。そしてバンガロールでの成功をきっかけに、それをモデルとした給食プログラムの取り組みが、デリーやハイデラバードといった他の都市にも広がっていった。このように、ISKCONとその関連組織は「社会をもてなす者」[山岸 2018 : 215] として自らを再編させるなかで、インドの政府や地元住民の間で存在感を高めてきた。そして、未曾有のパンデミックに直面してもなお、社会をもてなそうとするISKCONの一貫した姿勢に多くの関心が集まっているのである。

### 3. 内と外に向かう身体実践

インド中央政府は、新型コロナウイルスから人命を守ることを優先課題と定め、2020年3月25日より全土封鎖の措置に踏み切った。ISKCON デリーでは、この措置に先立って3月18日にすべての寺院が閉鎖され、一般の人々の参拝や信徒たちのプログラムが一切停止された。信徒たちの間では、公共の場で詠唱することよりも、まず政府の方針に従って自粛することが求められた。そして、自粛のときだからこそ、外ではなく内の世界すなわち自分自身の内面に向かうべきだと主張された。

パンデミックを前にした信徒たちは、ウイルスの感染や死への恐怖をそのまま受け止めるのではなく、感染の本質や死の越え方を人間の内側から捉えようとした<sup>14)</sup>。信徒たちは次のように語る。

目に見えない新型コロナウイルスの前では人間は脆弱である。有効な予防薬やワクチンが存在しないいま、接触による感染に対し恐怖と不安を覚えてしまう。しかし、それは人間自身が〔感染経路になり得る〕肉や血を口にして快樂にふけり、「自然の法 (すなわち神の法)」に反して感染のリスクを高めてき

たからである。人間は自然をもてあそぶ限り苦しんでいく。そして、汚れに満ちた物質世界に身を置く私たちは、根源的にこの汚れに自分自身を「感染」させていることに気づかなければならない<sup>15)</sup>。

物質世界に生を受けている限り、いつか死が訪れることを覚悟すべきである。生命の基礎となるエネルギー (Skt. *prāṇavāyu*) は、息を吐くたびに魂が身体から飛び出るのを引き止めるが、いつの日か魂は身体を離れていくものである。私たちはそういった死に賢明に向き合うべきであり、物質的な楽しみに溺れ無意味な私たちで死を迎えてはならない<sup>16)</sup>。

この世に生きる苦しみ〔つまり死の苦しみ〕から自らを解放するためには、私たちの根源であり、常に私たちの幸福を祈っている至高者のクリシュナに再びつながることが重要である。手指を石鹸で洗い消毒してウイルスから身体を守るように、唱名により意識を消毒することで汚れから守られる。クリシュナにつながる喜びは、自分だけでなく、家族や友人、全世界の人々を守ることにつながり、クリシュナはこのパンデミックから世界を守ってくれる<sup>17)</sup>。

信徒たちは、ウイルス感染への不安や死に対する恐怖を、より大きな意味での「感染」から捉える必要があると語る。そして、その「感染」から世界を守り自らを解放するために、唱名を通じて神と接触すべきことを確認している。さらに、神との接触を食によって実現し、それを人々にもれなく経験してもらうように実践がシフトしていく。

デリーをはじめとする都市では、不安定な暮らしを強いられた何百万という移民労働者やスラム住民が失職し、食料を求めて都市の外に流出する事態が封鎖前から起きていた。デリー政府にとっての第一の懸念は、この移動によってウイルスが村落部へ持ち出され、インド全土で感染者が爆発的に増加することであった。そこで政府は、感染予防のために、州境を跨ごうとする人々に宿泊場所と1日2回の食事を提供し、一定期間自粛させる対策をとった<sup>18)</sup>。

一方ISKCONデリーでは、バクティヴェーダーンタの直弟子であるゴーパーラ・クリシュナ・ゴースワミー（Gopala Krishna Goswami）によって社会奉仕の指針が確認され、「温かいプラサーダムを直ちにたくさん配給する」旨の指示が信徒に向けて出された<sup>19)</sup>。ヘルシーで栄養のある料理の提供を政府に申し出たISKCONデリーは、支援活動の承認をすぐにとりつけた。封鎖2日目には、デリー首都圏首相のアルヴィンド・ケジュリワール（Arvind Kejriwal）が、支援活動に名乗りを上げたISKCONを会見のなかで称えている<sup>20)</sup>。こうしてISKCONデリーは、政府との連携を図りながら、移民労働者といった人々に向けてプラサーダムを大規模に提供することになった。

#### 4. 封鎖期間の支援活動とアピール

デリー首都圏では、3カ所のISKCON寺院やセンターを中心に、毎日30万人に向けてプラサーダムが提供された（4月上旬時点）。とくに、西デリーのドウワールカーにあるシュリー・シュリー・ルクミニ・ドウワールカーディシュ寺院（Sri Sri Rukmini Dwarkadhish Mandir）では、ISKCONのなかでも最大とされる調理場が設置され、朝晩それぞれ10万人に料理が配給されてきた。調理場には、1日2回のシフト（朝3時から8時までと14時から17時まで）で100人以上の信徒や業者が集うようになった<sup>21)</sup>。寺院ゲートでは、調理担当者を対象に警察による検温が行われ、手指の消毒とマスクの着用が徹底されている。

屋外には、野菜の洗い場、野菜の裁断場、野菜カレーの調理場、豆カレーの調理場、コメの炊き出し場、パン作り場（手作りと機械）が設けられた<sup>22)</sup>。調理された料理は祭壇のジャガンナータ（クリシュナと同一視されている）像に献供され、その後プラサーダムとしてそれぞれの鍋などに戻される。容器に詰められた料理は外で待機する約150台の電動リキシャやサイクル・リキシャに次々と積載され、政府により指定されたデリー南西部の173カ所のポイントまで運搬される<sup>23)</sup>。運搬する運転手たちの検温も行われ、手袋やマスクの着用が徹底され、さらに、配給場所の情報などを記載したスリップが運転手ごとに発行される。

各ポイントの配給は、調理時間に合わせて2回（9時から11時までと18時から20時まで）行われる。ポイントに配置された警察や政府関係者は、2メートル間隔に人々を整理させ、彼らを配給まで誘導し、料理が円滑に配給されるよう監視する。集まった人々は紙皿を受け取るか、自分でプレートなどを持参するように促され、手袋を着用した配給スタッフに料理をよそってもらい、回収された容器や用いられた調理器具は、保健・家族福祉省のガイドラインに基づいて丁寧に洗浄される。

ここで注目したいのは、支援活動の詳細が不特定多数の人々に向けて、普遍的な言葉をもって発信されている点である。まずISKCON デリーからは、「感染症の発生にともなう食料不足の不安定な状況を緩和する」ために、栄養のある料理を大量に準備し、とめどなく配給することがまずアピールされる<sup>24)</sup>。そのうえで、保健・家族福祉省のガイドラインに従って、①ウイルスに負けない「ヘルシーで多様な」料理を作ることと、②衛生管理のもとで効率よく配給することが強調される。

前者については、熱したバターやスパイス（クローブやメース、カレーリーフなど）によって人々の免疫力を高め、ウイルスの感染から身を守ることが主張される。また、人々が料理に飽きないように、日替わりでさまざまな食材を用いるという<sup>25)</sup>。ここから、神よりも人々の健康や好みのために調理が行われることが発信され、より普遍的な次元で支援活動が説明されていることがわかる。

後者については、運搬する運転手の名前やナンバープレート、連絡先、配給場所、配給人数などがコード化され、配給される料理の追跡が可能であると強調される。また、料理が不足した場合や緊急で配給が必要になった場合は、電動リキシャにとり付けられたGPSにより、担当者同士で連絡をとり即座に対応するという。さらに、配給ポイントでの整列状況をドローンで確認している点や、緊急時のヘルプラインが準備されている点なども紹介される<sup>26)</sup>。

ISKCONは、一般のマスメディアにも、プラサーダムの分配やクリシュナへの奉仕について語るときがある。しかしそれ以上に、政府と協同して栄養のある料理を効率的に配給し、食料不足の不安定な状況を打開していくことをア

ピールする人が多い。寺院の専用チャンネルでさえも、クリシュナへの奉仕よりは、「飢えに苦しむ人々への奉仕」「社会支援のための奉仕」という言葉が多く聞かれる。ドゥワールカー寺院の副寺院長であるアモグ・リーラー (Amogh Lila) は、支援活動について次のように語る。

空腹で苦しんでいる人々はどこかにいます。そういう人々のために ISKCON は奉仕するのです。洪水や飢饉のときでも、私たちは社会を支援するために奉仕する準備ができています。これ〔コロナ禍のいま〕も支援するときです。外は危険です。それでも信徒たちは〔外に〕出て、温かいプラサーダムを作り、それを積み込んで、必要としている人々に届けているのです<sup>27)</sup>。

アモグ・リーラーは、非常事態に備えてきた ISKCON が、コロナ禍でも変わらずに支援する心構えができていることを明確にした。そして、信徒たちが危険を顧みずに人々のために行動を起こしていると強調する。ここでは、宗教的使命感は残されているものの、神との関係は捨象され、人々や社会への奉仕に重きが置かれていることがわかる。

## 5. 実践に魅了される人々のつながり

このような ISKCON の信徒によるアピールを受けて、支援活動には多くの個人や団体が多様な意図をもって関わりをもつようになった。企業やその経営者たちは巨額の寄付を通じて積極的に活動に関与するようになり、社会的責任を果たそうとする。バラ・ビジネス (Bada Business) 社の社長を務め、1000万人以上の動画登録者を抱えるヴィヴェク・ビンドラ (Vivek Bindra) は、ISKCON に対し1000万ルピーを寄付した<sup>28)</sup>。彼はコロナ禍における支援について次のように訴える。

私の記憶では、これ〔新型コロナウイルスの発生〕は、「世界」とくに人口密度の高いインドが現在直面している最も困難な問題の一つとなっています。私

にとってこの国に暮らす人々が第一です。私たちは速やかに行動を起こし、できる限り互いを支えていく必要があると皆さんに訴えたいのです<sup>29)</sup>。

ビンドラは、困難に直面するインドの人々のために行動することを第一の課題とみなす。そして、社会的責任あるいは国家的責任をもってこの問題に向き合おうとする。彼は自身の配信動画のなかで、新型コロナウイルスに対抗するポイントとして、「食の事業（operation）で宗教組織と結びつく」ことを挙げた<sup>30)</sup>。そして、信仰者は自分の命をかけて奉仕する者であるとし、政府と連携するISKCON デリーの取り組みを「素晴らしいロールモデル」だと評価した。

その他にも、アダニ・グループ（Adani Group）やジンダル・グループ（Jindal Group）など、多くの企業が寄付を申し出たが、これらの名前はISKCONや関連団体のホームページなどで紹介され、それが大きな宣伝につながっている。またそういった場所に、ネット・バンキングやデジタル決済システムが用意され、個人でも自宅から容易に寄付できるようになっている。たとえば、多くの動画登録者数を誇るビンドラがISKCONへの寄付について公言し、「速やかに行動する」「できる限り支えていく」と口にすれば、それによって多くの寄付者が生まれることは想像に難くない。

さらにこの支援活動は、調理や運搬の担当者にとっても意味のあるものとして受け止められている。調理には、ISKCONの信徒だけでなく、寺院の近隣住民や業者なども積極的に従事している。寺院の近所に住む女性たちは、記者にインタビューを受けた際、調理場での活動について次のように答えていた。

国のため、人々のために奉仕できることを本当に光栄に思います。

ここに来て、本当に素晴らしい活動をしているんだとわかりました。そして、なかから幸せが湧いてくるのがわかるんです。

心から幸せだなあと。このような仕事できて、本当に嬉しいです。インドの住民はこう言います。「首相が路上に出て〔人を助け〕、ロックダウンのルールを守って、自粛して安全でいるようにと言っている」って<sup>31)</sup>。

彼女たちはISKCONの信徒ではないが、国や人々のための奉仕を、自分自身の内側の幸福につながる活動あるいは仕事と捉えている。また、封鎖期間においても、誰かのために行動することがインド国民のよき振る舞いだと言った。それと同時に、首相の言葉通りに行動できているとの、地域住民としての誇らしさをうかがうことができる。

また料理の運搬は、仕事のない電動リキシャやサイクル・リキシャの運転手にとって、重要な機会になっている。西デリーに暮らす電動リキシャ運転手のMは、任された料理の運搬についてこのように語る。

前は1日に700ルピーを稼いでいましたが、今は2回ご飯を運んでほしい400ルピーをもらっています。でも死にそうなくらいに腹を空かせるよりはまだましです。封鎖になってから、一晩で仕事〔乗客〕がなくなりました。4人の家族を養わないといけませんから、この仕事が本当に助かっています<sup>32)</sup>。

Mは料理の運搬を、家族を養っていくための大切な仕事と捉えており、どうにか糊口をしのぐことができている。そして、封鎖後も変わらずにリキシャのハンドルを握り、人のために働けることに安心感を抱く。なかには、このような事態にもかかわらず、運搬の報酬を受け取らないサイクル・リキシャの運転手もいる<sup>33)</sup>。おそらく、毎日の食料を確保することができ、自分が必要とされている場所があるだけで十分と考える運転手もいるのだろう。

何よりもこの支援活動は、食べ手の命をつなぎ、彼らを都市につなぎとめる場として機能している。ビハール州からデリーに出稼ぎにきたSは次のように語る。

私たちは飢えていましたが、ISKCONの人たちが毎日ご飯をくれます。このように食事をとり続けることができれば、自分の田舎に帰る必要もなくなります<sup>34)</sup>。

封鎖によって食料を入手できなくなったSにとって、配給される1日2食の料理はデリーで生き続けるための活力となっている。インフォーマル・セクターに従事する多くの人々が、「食べることでさえできれば都市を去ることはない」と口にする。これは、当初政府が懸念していた、ウイルスの拡散につながりかねない都市住民の流出のくい止めにも一役買っていると考えられる。

このように、さまざまな言葉でアピールされたISKCON デリーの支援活動は、食料アクセスの断絶やウイルス拡散の問題に取り組む政府の思惑や、社会的責任を果たし広告として活用する企業の考え、他者への支援を内面の喜びに変換したり、自分自身の家計を支えたりする支援者たちの意志、あるいは命をつなぎ都市にとどまる被支援者たちの動機など、諸々の意図によって展開されていることがわかる。

## 6. もてなし味わう情動実践の展開

ISKCON 関連の調理場は全国77カ所にまで広がり、約7000万食が配給されるまでにいたっている（2020年8月29日時点）<sup>35)</sup>。ここで、コロナ禍のなかでISKCONの食の実践がなぜこれほどまで大規模に展開されるようになったのかまとめてみる。都市に暮らす移民労働者やスラム住民の貧困問題に直面し、財政的・制度的課題を多く抱えた政府は、ボランティア・セクターの活動に頼らざるを得ない状況にある。そのようななか、ISKCONのような新興宗教組織の派生団体による支援活動が注目されるようになった。ISKCONは、組織外におけるプラサーダムの提供も神に対する奉仕として位置づけ直し、これを社会奉仕の基底理念としていく。特定の教義に基づいたプラサーダムの実践に公共的な価値が付加されたことで、支援活動は政府をはじめ多くの人々に支持されるようになったのである。

新型コロナウイルスから人命を守るために行なわれた全土封鎖は、貧困層の食料アクセスを断ち、都市外へのウイルス拡散のリスクを高めることになった。一方ISKCONにあっては、この全土封鎖により、人間の内側に目を向けながらクリシュナと接触する重要性が確認された。そして、唱名ではなくプラ

サーダムを通してその接触の機会を広げていく実践が前面に現れるようになった。それは、政府が懸念していた食料アクセスの断絶とウイルスの拡散を回避する取り組みとして大きく期待されている。

ISKCONは「免疫力を高める多様な料理を効率的に届ける」との公共的テーマを掲げ、奉仕活動の道を人々にアピールしていく。プラサーダムは魅力的な「公共食」となり、多くの個人や諸集団がその提供をめぐって多様な意図をもってつながるようになった<sup>36)</sup>。こうして、大規模な料理の配給を可能にしたISKCONは、宗教組織を越えた「社会をもてなす」存在として広く認知されるようになったのである。

では、コロナ禍のなかで、インド都市部の社会関係はいかに構築されてきたのか。ISKCON デリーの実践から見てきた「社会のもてなし」は、供物のお下がりを通じて神との関係を構築するような、特定の価値（制度）を前提とした関係をもたらしただけではない。それは、食の回路が失われつつある都市的状况で、栄養のある聖なる料理で人々をもてなし、つながりを生み出そうとするような、より開かれた運動として捉えられる。

栄養のある聖なる料理でもてなし共食するという実践は、それ自体が自己と他者をつなげる身体・情動的な運動であるため、公共世界の身体活動に容易に接続できた。こうした実践は、特定の価値だけではなく、異なる複数の価値（たとえば社会的責任、仕事、社会奉仕、生存など）に支えられながら広がっている。そして、異なる価値観で同じ物を口にする身体・情動的なつながりを通じて、人々は食ることや生きることについて再考を促されているのだ。

プラサーダムの公共化によって起こっている新たな食のあり方は、ISKCONが提示する制度的な宗教実践ではなく、かといって貧困層を支援するためのたんなる公共政策でもない。「異なる身体（個人内で跨いでいく多数の身体）」を軸とした複数の価値によって、宗教世界と公共世界を越えた生活の場から立ち現れるような、食や生のあり方を問い考えるダイナミックな社会関係である<sup>37)</sup>。

それは、食を通じた身体・情動的な他者への働きかけ、すなわち情動実践を根本としているがゆえに、人間の生の根源に迫っていく。誰かのために調理

し、運搬し、誰かと食べるという営みには、人間の生物学的な生だけでなく、身体を軸にした他者との共在性が息づいている。そこでは、食と自己と他者の間のつながりが公的領域へと開かれていくような、大きなダイナミズムを見ることができるのだ。

まず、不特定多数のしかし一人ひとりの食べ手を喜ばせようとする情動から生まれる経験である。食べ手の味覚に向き合い、美味しくて栄養のある料理を作り運ぶことは、生命の経験に関わる力を人々に差し出す行為にはほかならない。他方の不特定多数の食べ手は、美味しくて栄養のある料理を口にすることで、調理人や運搬人を信じ受け入れる。そして、その潜在的な力を他の食べ手と共に身体に取り込むなかで、喜びつながっていく。このように、潜在的な力を通じた接触 (= 摂食) から情動的な関係性が生まれ、他者共在の大きな流れができる。

そういう意味では、情動はグロスバークの示す通り、主体を客体や経験に結びつけるような「生き生きとした感覚や生の活力」[グロスバーク 2018 : 48-49]として捉えられるのかもしれない。人間は自らの固有の生を躍動させ価値づけていく存在であり、そのために他者の存在が不可欠であることは論を俟たない。その点において、人間の生命過程に直結し、他者との共在を前提とするもてなし味わう情動実践は、自己のかけがえない生を鼓舞し価値づける、ひとつの可能態をもっているのではないだろうか<sup>38)</sup>。

注

- 1) ISKCONの信徒の間では「プラサーダム (*prasādam*)」がよく用いられるため、本稿でもそのように表記する。Skt.と付したものはローマ字転写のサンスクリット語である。
- 2) ここでいう「公共領域」は、開かれていく動的な場という意味をもった言葉として用いる。田辺は公共圏を「複数の諸個人や諸集団が共通の関心事をめぐる相互的に関わり合いを持つて」開かれた場所と定義する [田辺 2014 : 256]。
- 3) 国立応用経済研究所 (National Council for Applied Economic Research) によると、2009/2010年度における都市部の上位貧困層 (Aspires : 年収所得 9 万から 20 万ルピーの世帯) が 42.3 パーセント、貧困層 (Deprived : 9 万ルピー未満の世帯) が 26.1 パーセントである。2009 年 1 月 1 日の時点で 1 ルピーは 1.81 円。都市の状況

や本稿全体の考察については、2015年に京都大学に提出した博士論文『現代インドにおける食と宗教—クリシュナ意識国際協会の奉仕を通じた味わいの共同性—』に拠るところが大きい。

- 4) 1日あたり2100キロカロリー（都市部）の栄養水準を満たす1973/74年の食料・非食料からなる消費バスケットに対する必要支出水準のことで、各州の価格差や価格変化を考慮に入れたうえで推計される。
- 5) ちなみに、1999/00年度の貧困指数では、デリーの貧困人口（貧困線以下の人口）は約115万人とされており、デリーの総人口の8.23パーセントだった〔首藤2006：98〕。
- 6) とくにデリーでは1991年から2001年の10年間で47パーセント以上の人口増加率（443万人）を見た〔Kumar and Bhowmit 2010: 46〕。
- 7) たとえばデリーでは、1997年以降にスラムの排除が本格化し、スラム住民が都市の資源を盗んでいるとの最高裁判所の発表（2003年）が排除の動きを後押ししている〔Batra 2010: 28〕。
- 8) ボランティア・グループによる活動はインド独立以前からすでに行われており、まず当時のキリスト教宣教師たちが宗教的な慈善活動（charity）を行ったのが始まりだった。その後、ブラフモ・サマージ（Brahmo Samaj, 1828年）、アーリヤ・サマージ（Arya Samaj, 1875年）、ラーマクリシュナ・ミッション（Ramakrishna Mission, 1897年）といった社会改革を目的とした組織が誕生した。またガンディーによる民族運動もボランティア運動を基礎としており（1920年以降）、さまざまな組織とのネットワークが築かれた。このように、もともとインドではボランティア活動と宗教的な要素が密接につながっており、それが独立後のボランティア活動にも引き継がれてきたと考えられる。中央統計局（Central Statistical Organization）は2009年の統計で300万のNGOが登録されているとしたが、ジョンズ・ホプキンス大学は2002年の調査で120万と推計しており、実際にはNGOの総数と宗教関係組織数は定かではない。
- 9) インドの状況については、従来のイデオロギー的な宗教の議論から脱却し、公共領域から排除されてきた（とされる）宗教的要素の公共的役割を捉え直すような動きも見られる〔cf. 近藤 2005；田辺 2014〕。
- 10) 味わうことが世界の対話・媒介を可能にすることについては、足立による以下の考察が参考になった。「味わうことは、（中略）人と嗜好品、味わう場所のみならず、それを取り巻くさまざまな人とモノとの連結・媒介過程から生み出されてくるものである。つまり、味わうことは、自己とモノ、自己と自己、自己と他者との対話・媒介過程とってよい」〔足立 2009：186〕
- 11) Radha.nameによると、ISKCON 寺院は現在世界に350カ所、農場をもったコミュニティが60カ所、学校が50カ所、レストランが60カ所あり、寺院の僧侶は1万人、定期的に寺院に通う信徒は25万人にのぼるとされているが、それらが正確か

- どうかは定かではない（2018年8月27日閲覧）。
- 12) ISKCONの歴史的背景および主要実践については、拙稿（2018）でやや詳細に述べている。
  - 13) 統計については、フード・フォー・ライフの公式サイト（<https://ffl.org/about-us/history-of-food-for-life/>）を参照した（2020年8月30日閲覧、以下同様）。
  - 14) ISKCON Newsを参照。なお本稿では、ウェブサイトや配信動画などを多く参照し、その内容を引用していることを予め断っておく。
  - 15) 同サイトを参照。〔 〕は筆者による補注。以下、同様。
  - 16) ジャガンナータ・デーヴ・ダース（Jagannatha Dev Das）によって配信された、バクティヴェーダーンタの直弟子バクティ・チャル・スワーミー（Bhakti Charu Swami 1945-2020）の動画より（2020年3月2日配信）。バクティ・チャル・スワーミーは新型コロナウイルスに感染し、2020年7月4日にアメリカで逝去した。彼の突然の死によってISKCONは大きな衝撃を受けたが、彼が亡くなる前に語った「死を制することの重要性」については、信徒たちの中で深い意味をもって受け止められている。
  - 17) 前掲、ISKCON Newsを参照。
  - 18) ISKCON News 2を参照。
  - 19) ISKCON Dwarkaのウェブサイト参照。
  - 20) ISKCON Food Reliefのウェブサイトから引用。
  - 21) 同ウェブサイト参照。
  - 22) My Ashrayaによる動画（2020年3月30日配信）参照。
  - 23) Radio Dwarkaによる動画（2020年4月7日配信）参照。
  - 24) 前掲、ISKCON Dwarkaのウェブサイト参照。
  - 25) 前掲、Radio Dwarkaによる動画参照。
  - 26) The Hinduのウェブ版（2020年4月19日配信）参照。
  - 27) 前掲、My Ashrayaの動画参照。
  - 28) 2020年8月30日時点で1ルピーは1.44円。
  - 29) Business World（2020年4月5日配信）参照。
  - 30) Dr. Vivek Bindra: Motivational Speakerの動画（2020年4月2日配信）参照。彼はISKCONと非常に近い関係にあることがわかっている。
  - 31) ISKCON DwarkaがアップロードしたHar Khabarのニュース（4月2日配信）参照。
  - 32) 前掲、The Hinduから引用。
  - 33) ISKCON Desire Treeのウェブサイト参照。
  - 34) 前掲、ISKCON Food Reliefのウェブサイトから引用。
  - 35) 同ウェブサイト参照。
  - 36) 公共食は通常、公的機関における給食のことを指す〔cf. 杉山・木村・松野

- 2012：155] が、ここではより開かれた意味合いで用いる。
- 37) ここで注意したいのは、この社会関係には支援や賛同だけでなく、摩擦や反発も想定され得るという点である。本稿においてそのような事例は見られなかったが、ここには、つながりゆえにそれが揺らぎもするようなダイナミズムがあると考えられる。
- 38) 本稿を通じて、コロナ禍の最前線で対応を続ける医療従事者へ深い敬意を表するとともに、ウイルス感染者の早期回復を祈り、すべての犠牲者に対し哀悼の意を捧げたい。

### 参考文献

- 足立明. 2009. 「人とモノのネットワーク—モノを取りもどすこと」田中雅一編『フェティシズム研究1 フェティシズム論の系譜と展望』京都大学学術出版会, 175-93.
- グロスバーク, ローレンス. 2018. 「ふられた気持ち：言説、権力、情動」挽地康彦訳『カルチュラル・スタディーズ』6：47-58.
- 近藤光博. 2005. 「宗教復興と世俗の近代—現在インドのヒンドゥー・ナショナリズムの事例から」『現代宗教』東京堂出版, 83-105.
- 首藤久人. 2006. 「公的分配システムをめぐる穀物市場の課題」内川秀二編『変動するインド経済—光と陰』アジア経済研究所, 77-125.
- 関根康正. 1999. 「現代インドにおける『宗教対立』現象と脱近代化の模索—『コミュニケーションの彼方へ』中牧弘允編『現代世界と宗教』国際書院, 89-111.
- 杉山道雄・木村孝子・松野希恵. 2012. 「フードシステムから見た『公共食』の役割と課題」『東海学院大学紀要』6：155-60.
- 田辺明生. 2014. 「現代インドにおける宗教と公共圏」島藺進・磯前順一編『宗教と公共空間—見直される宗教の役割』東京大学出版会, 235-60.
- 松嶋健. 2014. 『プシコナウティカ—イタリア精神医療の人類学』世界思想社.
- 山岸伸夫. 2018. 「奉仕と給仕のあいだ—インド都市部におけるグルメ・プラサードの公共文化」『東洋哲学研究所紀要』34：211-28.
- Batra, L. 2010. Out of Sight, Out of Mind: Slum Dwellers in 'World-Class' Delhi. In B. Chaturvedi ed., *Finding Delhi: Loss and Renewal in the Megacity*. New Delhi: Penguin Viking, pp. 16-36.
- Kumar, S. and S. K. Bhowmit. 2010. Street Vending in Delhi. In S. K. Bhowmit ed., *Street Vendors in the Global Urban Economy*. New Delhi: Routledge, pp. 46-68.
- Nandy, A. and R. Jahanbegloo. 2006. *Talking India: Ashis Nandy in Conversation with Ramin Jahanbegloo*. New Delhi: Oxford University Press.
- Priya, R. 2006. Town Planning, Public Health and Delhi's Urban Poor: A Historical View. In S. Patel and K. Deb eds., *Urban Studies*. New Delhi: Oxford University Press, pp. 223-45.

- Toomey, P. M. 1986. Food from the Mouth of Krishna: Socio-Religious Aspects of Sacred Food in Two Krishnaite Sects. In R. S. Khare and M. S. A. Rao eds., *Food, Society and Culture: Aspects of South Asian Food Systems*. Durham: Calina Academic Press, pp. 55-83.
- Business World. <http://www.businessworld.in/article/Coronavirus-pandemic-Business-Coach-Dr-Vivek-Bindra-Donates-Rs-1-Crore/05-04-2020-188295/>
- Dr. Vivek Bindra: Motivational Speaker. <https://www.youtube.com/watch?v=42JkCC2m7No>
- ISKCON Desire Tree. <https://iskcondesiretree.com/profiles/blogs/iskcon-delhi-steps-up-efforts-to-help-poor-residents-with-warm-he>
- ISKCON News. <https://ffl.org/about-us/history-of-food-for-life/>
- ISKCON News 2. <https://iskconnews.org/iskcon-india-distributes-over-1-million-plates-of-prasad-during-covid-19-lockdown,7314/>
- ISKCON Dwarka. [https://iskcondwarka.org/corona-relief/index.html?gclid=EA1aIQobChMIg9rJyZrD6wIVE62WCh0HCwFgEAAYASAAEgIeS\\_D\\_BwE](https://iskcondwarka.org/corona-relief/index.html?gclid=EA1aIQobChMIg9rJyZrD6wIVE62WCh0HCwFgEAAYASAAEgIeS_D_BwE)
- ISKCON Dwarka. <https://www.youtube.com/watch?v=WpdFzHbV7IA>
- ISKCON Food Relief. <http://iskconfoodrelief.com/>
- Jagannatha Dev Das. <https://www.youtube.com/watch?v=7kbCqhsVfVE>
- My Ashraya. <https://www.youtube.com/watch?v=PUIJ5O4kLSg>
- Radio Dwarka. [https://www.youtube.com/watch?v=ZH\\_c6JFC0Ms](https://www.youtube.com/watch?v=ZH_c6JFC0Ms)
- Radha.name. <http://www.radha.name/images-gallery/temples-worldwide-with-india/asia-and-india-iskcon-temples/india-iskcon-temples>
- The Hindu. <https://www.thehindu.com/news/cities/Delhi/divine-service/article31384031.ece>